

人間

って体力がつくとこころまで元気になるんだよねー

彼女はにっこり笑顔で言うのである。「ほら、脚にいままでなかった筋肉がついてきた、みたい」

2年前、中央大学に入学してからずっと彼女の通学手段は自転車だ。180円のバスもあるけど、よほどのカンカン照りか雪か大雨でない限り、使わない。山頭火の「分け入っても分け入っても青い山」じゃないけれど、いけどもいけども上り坂、一山超えてまた一山を、足で漕いで通っている。

授業開始ギリ

ギリで教室にやってくる彼女の頬は紅潮して、目はパッチリ。「玄関から20分。交通渋滞カンケイなく、風を友に、チャリ通”は車やバイクなんかよりずーっと魅力的なんだってば!”

口も元気いっぱいなのである。

そもそもは高校2年のとき。バイト代から捻出する定期代5千円は痛かった。ふと「電車を使わなければこのお金は自由に使えるではないか!」と気づいてしまった。それか

らチャリ通、隣町まで50分かけて。

ケチ根性が原点と言えなくはないが、すぐに自転車のとりこになった。四季の変化を肌で感じる風や、花のにおいや色づく紅葉……。美しいエメラルドグリーンのマウンテンバイクで、ママチャリの男の子たちを抜かしていく、それがまた爽快。ショールウインドウに映った自分の自転車姿を見れば、バスの、眠むたそうな乗客たちより「カッコイイ!」。おまけに車やバイクを使わずにいることは大気汚染やヒートアイランド現象

いけどもいけども上り坂

チャリ通はみるみる元気

「自転車で

いいことだらけでしょ!」

「なの」と彼女は言った。「チャリ族は肩身が狭い。専用レーンがないばかりに」。狭い歩道での歩行者との事故も多い。道路交通法で、車道の左側を走行することも認められているが、怖いし危険。早く専用レーンを改善して立派な交通手段としてもっと市民権を、と毎朝邪魔そうに見下ろすドライバーに目で訴えている彼女である。(葎)

長

距離の電車通学の人なら身におぼしき女性がうつらうつらと船を漕いでいた。それも前後に大きく傾いで、並みの揺れじゃない。前へそのまま倒れてしまふのではないかとと思うくらい。

ある朝の京王線車内。学生とおぼしき女性がつらうつらと船を漕いでいた。それも前後に大きく傾いで、並みの揺れじゃない。前へそのまま倒れてしまふのではないかとと思うくらい。

お疲れの車内

夢心地と迷惑の間

倒れる寸前に、体勢を立て直す。平衡感覚の無意識、でしょうか、あれは。そしてまた居眠りに戻り、倒れそうになってまた体勢を立て直す。この繰り返しの繰り返し。起きる気配はさらになく、今度は船の漕ぎ方が横に変わった。まもなく、右隣に座っている女性に大激突した。女性はびっくりにして彼女を見る。彼女もさすがにびっくりして、「すいません」と隣に謝った。

それでも再び邪魔はやってくる。彼女はまた、

大揺れの眠りの中に。先ほど激突された女性はいつのまにか下車し、隣にはスーツを着たおじさんが座っていた。たまりかねた様子で、彼女のかばんをトントンとたたいて、おじさんは言った。「ちゃんと座ってください」。つい私としたことが、と恐縮しきった様子で身を立て直し、

彼女は「すいません」と頭を下げた。ようやくお目覚めになったようである。それからは無理にも目を見開き、席を立つときに、もう一度おじさんに「どうもすみませんでした」と謝ってから

お疲れだったんですね。その一挙手一投足をじっと見つめて、実況中継する私も私ではあるけれど。かきう私もつい先日、朝の電車で寝りこんでしまい、あやうく乗り越し寸前で電車を降りた。無理にたたき起こされたようなやな気分、頭はボケケツとしたまま。それでも、多摩動物公園からの坂を登っていくうちにだんだん頭も起きてくる、これもある種の快感。

さ、今日も一日がんばろう。(琴)



今年のGW、「ゴージャスに海外旅行」がナニヨと、R子(商・2)は実家に戻った。

東京から約3時間。久しぶりの一家だんらん。「一泊で温泉にでも行くか」「いやいや、日帰りで……」。話が盛り上がる中、妹が「O神社の前に、3日の9時半埋蔵金探しゲームが開催されるって。ほら、ここにチラシも」と差し出した。

参加費無料、神社までは、徒歩10分(いつもの愛犬ラブの散歩コースである)。行かない手はない!とみな賛成した。R子はさっそく散歩がてらラブを連れて下見に行くと、4町内会の役員たちがコースの紐を張ったりしていた。

「散歩かい? 明日宝探しにおいでよ!」

「どんな風に隠されているんですか?」

「お年玉のポチ袋に番号札が入っているから、その番号と引き換えに商品がもらえるんだよ。最高は1万円の4町内商品券だ!」

「そうなんですか。来られたら来てみます!」

しめしめ、いいこと聞いちゃった、

とR子はウキウキで家に帰ったものだ。

3日——お待ちかねの日がやってきた。いつも

は寝坊の子供たちも8時半にはぼちり目をさまし、化粧台の母らをせかせて、家族5人うちそろって会場へと急いだ。やる気満々である。

会場にきてみれば、小さな子供連れの家族が多かった。「大学生がこんな子供じみた行事に参加しちゃうしかなかったかな」と思わないでもなかったR子だが、まあしかし、この日ばかりは歳を忘れて、ガンバロウ。

「スタート!」と同時に、神社の石段を二人の妹たちは登っていった。R子は後からじっくりと探すことにした。数分後、偶然広い神社内でR子は妹と再会。妹はなんとポチ袋を3つも発見していた。それに引き換えR子は未だ0。あつという間に時間がきてしまった。

結局、見つけたのは、父と妹二人。母とR子ふたりは0だった。散々な結果に少々不満なR子と、「どうせ1万なんて当たりっこないんだか



ら」と開き直る母。5人はそのまま引き換え所に行った。まずは父、なんと「3000円の商品券」

の当たり。無口な父も皆に褒められてニコニコである。次に一番下の妹が、ナなんと1万円の商品券!をゲットしたのだ。「本日、2人目!」と役員さんもびつくり。下見にまで行ったR子を神様は見捨てなかったと思いきや、つづいて真ん中の妹……もなんと1万円! 「一家族で1等が

【 鄙の春 — 宝探しのトクケン】

2つも出ちゃっていいの!」と申し訳ないような気持ち。

「2万もあるから、今日の夜はパーツと寿司でも行こう。とりあえずお昼はカツ」と母の提案でカツ屋へ。食べながらの話題はもちろん夜の寿司の話。子供たちもウキウキしている。

会計で父が「早速ながら」と当たりの商品券を差し出すと、カツ屋のおじさんが一言。

「券の裏面にお店の名前のスタンプが押してあるでしょ。そのお店でしか使えませんよ!」

R子たちは固まった。「え……?」

で、寿司の話はその場でお開き。がっかりしながら帰る途中、さっきの役員さんに会ったので聞いてみると、自慢そうに、

「それが私たちの作戦なんです。もし、4町内の店どこでも使えたら、知っているお店でしか買わないでしょ? 今回、色々な店を知ってもらって4町内の活性化に繋がるようにしたんです」と言われてしまった。

「考えたものだなあ……」と、トクをしたのにちよつとソソった気分のR子であった。そして、「寿司屋に行かなくてよかったわ」とホッと胸をなでおろす母の姿。

鄙(ひな)の春、鎮守の杜のテンマツである。

(花)



この春入学した総合政策学部のAくんは、とある地方都市育ち。

あこがれの東京一人暮らしであった。しかし、「目を疑うことが多すぎて」と「多摩シヨック」を語るのだった。

始まりはいきなり、引越しを終えた当夜。手伝いにきた家族が帰った途端に寂しくなり、テレビのスイッチを入れた。たちまち、彼は青くなつたという。

「NHK以外映らない……。慌ててテレビの設定を調べてみたが、

どこも悪くはない。翌日、大家さんに確認をす

ると、家が電波障害を起こしやすい場所に位置しているらしいということが判明した。

「筑紫さんも、久米さんも、福沢さんもいない生活なんて……」

皮肉にも、彼の夢は「アナウンサー」なのである。

家にも仕方がないので、彼はモノレールを使い大学へ行くことにしたそうだ。

「モノレールで通学なんてかついい」と、一人笑みを浮かべていたが、笑みはやがて哄笑に変わった。彼を驚かせたもの、それは「トンネル」であった。中大生の生命線ともいえ

る多摩都市モノレールは多摩の山を越えるためにトンネルを掘った。

「とすれば、全国で唯一トンネルのあるモノレール、なんだよ」と、

これはやや興奮気味に語るのである。彼、じつは乗り物マニアで、このへんはやたらと詳しく、またうるさい。ここまできたらもう驚くものはないはずだった。だが……ある日、彼は

朝食をお腹一杯食べて満足し、「たまには歩いてみるか」と、ヒルトツプを出て北口から多摩動物公園駅へ

驚きの多摩— 中大生への成熟の道

一枚の看板に。

「山火事注意」

彼は思わずカメラ付きケータイで撮影をし、高校時代の友人に送ったそう。友人からの返信は「コンビ二あるの?」。彼は必死に抵抗した。

「あるさ。Fマートが」と。モノレールの改札口にはぼり軒、と書きかけた後段はデリートして。

そんな彼もようやく落ち込みから立ち直り笑顔に戻ってきた。友よ、

そうやって皆、この山中で中大生に染まって成熟するのだよ。よかった、ヨカッタ。

(創)

GW明けの日曜日、友人Iが家に遊びに来た。彼女とは昨年

11月の入試の時に知り合い、入学式で感動の再会を果たしたのだ。Iは三重県出身で今は中大の近くで一人暮らしをしている。私の実家は中大から自転車15分のところにある。

東京とはいえ、この多摩地域は地方に住む若者が憧れてやってくる東京のイメージとははなはだ違う。みなさんごぞんじのように。

彼女を家に呼

んだ方がいいが、ウチですること

なんて昔の写真を見せるくらいだった。しかも外は、あいにくの雨。し

ばし途方に暮れるうちに、話は「雨の日に大学にレインコートを着ていけるか」という話題に。結論は出

ないまま、何年もクローゼットにしまわれていたレインコートを引っ張り出し、二人で着てみたり。地元案内も兼ねて雨降りの中、散歩に行くことにした。公園に行き、小学校の時によく遊んだ滑り台を

したり、神社で賽銭も無いのに願いごとをしたり

……。

そして、しばらくブラブラ歩いているとIが問いかけてきた。

「Nちゃん、友達が来るといつもこんなことしとるん? (笑。やや嘲笑気味)」「……うーん、違うねえ」

事実、私はインドア派で用事がなければ外には出ないし、ましてや雨の日に散歩だなんてふだんの私にはあり得ないのである。ただ、GW前に「長島(Iの実家)帰りたいかも」と嘆く彼女を思い出したら、八王子

しみじみ「多摩雨情」… 新入生2人のGW

も好きになつてもらいたくなつたのだ。

最後に私たちは13階建てのマンションに昇った。そこからは、中大多摩センター付近を一望することができる。

「はあ—あと4年もあるのかあ—」

と、Iが呟いた。「そうだねえ」

私たちは始まったばかりの大学生活に、既にいつぱいいつぱいだ。でも、一人暮らしを始めた新1年生と比べれば私はまだまだ甘いもんだらう。これから、みんな、どう成長していくのか。私たちは4年後もレインコートに身を包んでいるかもしれない……。

(夏)



5 月の半ば、梅雨前の後楽園
キャンパス――。

「最近、授業中寝てばっかできー」

「今週、まともに授業聞いたの、

○〇だけだよ」

「学校来るのイヤになってきた。

なんか、来てても寝てるだけで意味ないんだもん」

「でもうちら、(学校に) 来てる
だけまだマシだったって」

5 月病の典型のような会話が聞こえてきた。

そのじつ私の
生活もだらしな
い。やりたいこ
とはたくさんあるのに、家に帰ると
ついだらけてしまう。やりたくない
ことは後回しにして、期限ぎりぎり
になって徹夜でその場しのぎ。いい
加減、毎日の生活がイヤになってくる。

じつは睡眠時間の削りすぎが原因
と思われる体調不良を起こし、学校
を休んでしまった。幸い私は学校生
活を再開することができたが、あれ
はひきこもりの始まりだったかもし
れない。救ってくれたのは友人との
メールだった。

――ある日突然、こんどは友人が

学校を休んだ。気心の知
れた仲なので、私は冗談
半分に、友人にメールを
入れた。

「おい、大丈夫か? 風邪ひい
た?」

「まあ、そんなとこかな」

「きのう無理したとか?」

「疲れかな」

最後の一言に私は驚いた。それ
と同時になぜか安心感を覚えた。自
分だけがだらだらと、追われるよう

「疲れかな」 救われたメールの一行

な辛い生活を
送っているの
だと思いきん

でいた。こんな身近なところに、同
じことで悩んでいる人がいたなんて。
私はなにか肩の荷が下りたような気
分だった。そのメールの一行で、友
人を鏡にして自分を第三者的な方向
からみることができた。深みにはま
りかけていた気持ちが楽になり、い
まではだいたい余裕をもった生活を
送っている。日常がそんなに変わっ
たわけではないのだけれど。
友人とのメールを、私はこんな言
葉で締めくくった。

「心に余裕が欲しいね」 (走)



関 東学生英語会連盟 (クエル) 主催の、 フレッシュユーマンミーティ ング(通称フレミ)が、

5 月9日に獨協大学で行われた。

クエルとは、中央大学 E S S を含
む約50もの関東圏の大学 E S S が加
盟している団体で、英語力アップと
他大交流を目的に、年間様々な大会
を運営している。

中大からも、2人が連盟委員(ク
エラー)として登録しており、フレ
ミの運営に参
加した。

「クエル」のついで 英語も体力も笑顔も大事

して頑張ったこ
とがもうひとつ
ある。

当日は、多
くの加盟大学から、約700人の新
入生がやってきた。
運営側のクエラーも約90人と、ク
エル主催の大会としては最大規模の
ものとなった。新入生は5、6人で
1テーブルに座る(くじで全員違う
大学になっている)。そこに応援に
来た上級生が1人入り、みんな
デイスカッションを約2時間、全て
英語で行われた。

「大学でなにがやりたいか?」あ
なたのモットーは? 人生は何が大
切か?」をトピックに。

中大クエラーの T は、会場係とし
て朝から夕方までテーブルセッティ
ング、誘導、お菓子配りに後片付け
と、額に汗して働いた。

「大会準備の説明受けた時、必
要なのは、替えのシャツ・体力・若
さって言われたんだ。まったくその
通りだったよ! 4階建て校舎を3
棟使ったから、誘導もハンパじゃな
く辛かったし、蒸し暑いのにスーッ
だったからさ。絶対やせたわ」
終始ヘトヘトの T だが、一日を通

「誘導中1年生に、どこの大学な
の?とか、大会は初めてなの?って
聞いたら、どの子も緊張してまとも
に答えられてなくて。だからクエ
ラーは、一日中笑顔で接してあげな
きゃと思っただ」
5 月30日には、東京電機大学で「L
O V E 1 2」という留学生を交え
たデイスカッションが開かれた。そ
の会場係も、T は笑顔でやり遂げた
……つもり。

(香)